

一教員として貢献できること

高橋 佳苗 (大阪市立大学)

昨今のコロナ禍において、感染拡大の防止への取り組み、新常态への社会のありかたの変化等、会員の皆様におかれましても対応に追われ、ご心労のことと拝察いたします。

そのような社会状況の中、私はといえば、出産と時期が重なってしまい、職場の理解もあり早くからテレワークに切り替えさせていただきましたが、3月から小学校が休校、4月から保育所も預かり不可となり、家の中で我が子たちとともに、ままならない日々を過ごしておりました。

世間ではコロナに関する各種研究が実施され、私の所属する医学部附属病院の臨床研究・イノベーション推進センター (CCRI) の生物統計部門でも、或るコロナ治療薬の臨床試験を支援することとなりました。直接関わることはできませんでしたが、このことは、社会を脅かす疾病に立ち向かう職種に自身が従事しているということ、図らずも再認識させてくれる契機となりました。

平素には、私は大阪市立大学大学院医学研究科の医療統計学教室の助教も務めさせて頂いております。CCRIにて院内外の臨床研究の計画立案、中央モニタリング、統計解析支援等を行うとともに、医療統計学教室では、学生への講義や研究指導、また、学内外から寄せられる統計相談への対応に従事しています。

近年、医療職の方々の中で、臨床研究を実施するうえでの統計学の重要性への認識が高まっているためか、医療統計学教室に学びに来る学生は、統計学について理解を深めたい医療職の方がほとんどです。勉強熱心な学生が多く、日々の講義や研究指導を通して、私も身の引き締まる思いでいます。一方で、医療職の方々には、臨床統計家になることを目的とされているわけではないため、講義や研究を通じて統計学をどこまで学んでもらえばよいのか、学生によって学びたい知識レベルに個人差もあり、難しさも感じています。将来的に臨床研究等の場で活躍できる人材を輩出するために、統計学を学んだ医療従事者に対して社会から何が求められているか、どこまでの知識、解析スキルがあればよいのか、ということを見極めていくことが重要なことと考えています。

また現在、出産を終えて改めて認識したことは、統計学がよりよい医療に繋がっているということです。病気ではないとされる出産すら、手厚い医療に助けられて何とか乗り切ることが出来ますが、その医療は統計学に裏付けられた数多の臨床研究によって支えられています。医療の発展、ひいては計量生物学の発展のために私が貢献できることは、解析担当者として臨床研究支援に力を注ぐことは勿論、更なる臨床研究の活性化のため、一教員として人材育成に尽力することであると感じております。

最後になりましたが、シリーズ「計量生物学の未来に向けて」に寄稿する機会をいただき、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。京都大学の専門職学位課程で医療統計学を学んで10年が経ちました。一度統計から離れたこともありますが、様々なご縁があり、なんとか仕事を続けられています。そのことに感謝し、計量生物学の今後ますますの発展を祈りつつ、微力ながら自分自身も発展に寄与できるよう努めたく思います。